

五^パ、十三年は六三・四^パ、豊岡町ではそれぞれ二三・四^パ、二一・五^パ、豊岡町のように積極的な地域開発計画によるものではなかった。村当局も積極政策というよりも、むしろ村民負担の軽減を志向していた。もっとも、津居山港修築への期待は明治末から強い。しかし、村費を使用し、村民の負担をいとわず修築を行なう姿勢は、北但震災の後までは表面化しない。

第二節 北但大震災

無震地方 但馬地方は古来、地震の少ない地域で、但馬に住むかぎり但馬が震源の地震とは無縁であるとの大震災 考えられてきた。安政元年（一八五四）十一月の大地震は江戸を始めほぼ全国に震動が及んだといわれ、大きな被害をもたらしたことで知られているが、但馬でも珍しく「地が震った」ものの取立てて損害を生じるほどではなかった。

『大日本地震史料』は允恭天皇五年（四一六）七月十四日河内国の小震以来、慶応元年（一八六五）の館林の小震に至る二〇〇四件の地震を各種文献をすぐって記録している。中世までは京都、近世は江戸と、記録が特定地域に片寄りがちなのは止むを得ないが、「但馬」が顔を出すのはわずかに一件にすぎない。寛文六年（一六六六）八月一日、但馬に小震があったという。とすれば、北但大震災は記録上は二六〇年めに但馬を直撃した地震ということになる。

北但大震災は水害を除いては当地最大の災害で、種々に記録され語られてきている（『北但震災誌』『乙丑震

表110 北但大震災被災表（城崎郡・出石郡中関係地区）

町村	被害戸数						被災人口			
	総戸数	全焼	全壊	半壊	破損	計	総人口	死者	傷者	計
豊岡町	2,178	993	234	171	489	1,887	11,097	87	293	380
新田村	480		11	73	331	415	2,449	1	3	4
八條村	368		23	49	224	296	1,910	2	7	9
三江村	408		18	20	125	163	2,527		8	8
港村	742	144	337	149	96	726	4,434	33	243	276
田鶴野村	444		52	40	208	300	2,311	8	13	21
五莊村	677		34	14	421	469	3,293	5	9	14
中筋村	498		15	31	254	300	2,767		4	4
奈佐村	420			1		1	2,231		1	1
神美村	849			40		40	(記載なし)			
計	7,064	1,137	724	588	2,148	4,597	33,019	136	581	717
(参考)城崎町	702	547	46	6	88	687	3,410	272	198	470

〈表111〉と比較すると一部に
くい違いがある。

- 注 1. 『豊岡復興史』による。
2. 「神美村」には現出石町域分を含む。
3. 上佐野地区分は表中に含まれていない。

災誌『豊岡復興史』、その他。

大正十四年五月二十三日午前十一時九分五十七秒、

豊岡・城崎方面に烈震があり、神戸測候所豊岡出張所の地震計は第一震で破損した。初めは水平動、次に上下動となって多数の家屋が倒壊、間もなく火を發し、火は二十四日未明に及んだ。震源地は円山川河口数マイルの深さ五〇イットロ前後のところ、マグニチュード七といわれている（巻頭写真）。

被害は人家・人口が密集する豊岡町で大きかったのは当然であるが、総戸数・総人口に対する被災比で見ると、港地区が最大で豊岡町がそれに次いでいる。

隣接する城崎町の被災比は被災地区内では最大であるが、温泉街としての特長事情によるものであることは言うまでもない（表110）。

豊岡町の災害は、港村・城崎町と同様に、火災によって増幅されたもので、初夏の乾燥した空気に加えて北西の風が加わり、昼食の炊事用の火と推定される原



写154 豊岡小学校校庭の避難民
上方はまだ燃え続けている。



写155 田結地区の震災記念碑（昭和15年建立）



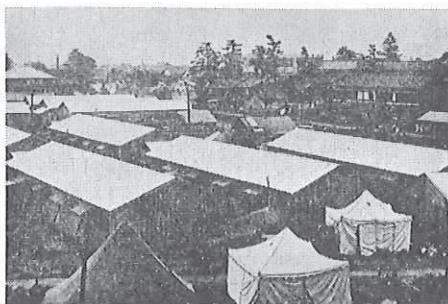
写156 北但大震災で横転した円山川改修の土砂運搬用機関車

因で各所に火災を発生、町北部の小田井地区の大部分を残して町中心部に延焼して、現生田通り以北を焼き尽した。神武山を取り巻く旧郭内及び豊田町以南の被害は軽少で、豊岡小学校や豊岡中学校が一時的な被災者避難所・救護所として用いられた。

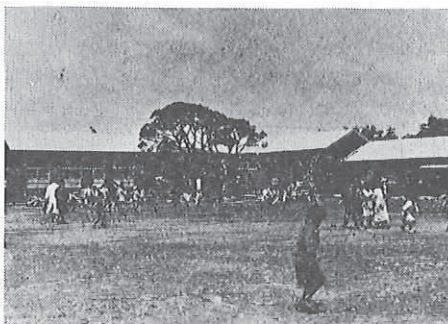
港地区は震源に近く、津居山は二五〇戸のうち一四五戸が焼失し、残る一〇五戸が全半壊した。田結は周辺山間部に断層亀裂を生じるなど、直接的な物理的衝撃が大きく、死者数七名は人口比一・六セブティで、火災による死者が多い城崎町の七・六五セブティには及ばないものの、火災のなかった地区としては人的被害が大きかった。多くの被害地区が火災の後遺症によって被害記録の作成保存にも影響を受けたと思われるが、火災のなかつ



写157 復興中の宵田町通り（大正14年）
宵田橋から北を望む

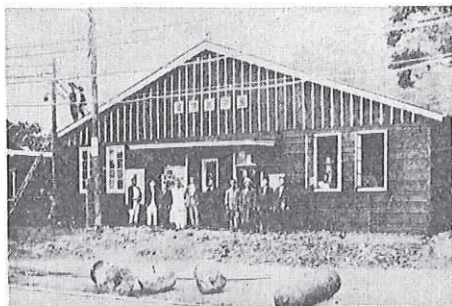


写158 被災者用バラック（大正14年6月）
中央の松の木の方う側は豊岡小学校



写159 豊岡町庁舎用の急造バラック
豊岡小学校校庭。後に豊岡商工実習
学校校舎に充当（大正14年6月）

第二章 震災及び大豊岡構想の形成と展開



写160 震災後、応急に新築された郵便局
本町・久保田邸西（大正14年）

表111 関連地区被害表 『北但震災誌』による

地 区	住 居		死者	傷者	人口対 死者比
	焼 失	全半壊			
豊 岡 町	1,000	760	87	293	0.78%
五 莊 村	56	441	5	9	0.15
田 鶴 野 村	102	326	8	13	0.35
新 田 村	28	452	1	3	0.04
八 条 村	13	266	2	7	0.10
三 江 村	15	175	0	8	—
港 村	148	539	33	243	0.74
中 筋 村	0	49	0	4	—
奈 佐 村	0	0	1	1	—
神 美 村	0	0	0	0	—
(城崎町)	548	6	261	198	7.65

当時、小田井は円山川改修工事のため町域の大部分が移転することになっていた。震災ではほとんどが焼け残った数少い地区であるのに、工事のための立退き先とされた寿

された。貸用期間は、大正十四年六月から七月三十一日までという緊急避難用ながら賃借料は無料で、期限後は家賃月額二円という条件であった。

豊岡町の六〇〇戸に対し申し込みは二〇〇件に及び、小田井の二三戸一二三人の申込みには二〇戸が配当された。貸用期間は、大正十四年六月から七月三十一日までという緊急避難用ながら賃借料は無料で、期限後は家賃月額二円という条件であった。

罹災復興 罹災後、兵庫県は直ちにブラック住宅建設を進め、罹災者の応急の住居にあてた。豊岡町で十興対策二ヶ所に六〇棟六〇〇戸、津居山・瀬戸に一七〇戸であるが、一戸（五名以上収容）あたり三

た田結地区は震災記録が豊富に保存されていて、当然のことながら救護・救援に関するものが多数を占める（表112）。

表112 城崎郡港村田結地区北但大震災記録概要

『田結地区文書』より

(1) 被害に関する記録

No.	年月日	標 題	作 成 者
1	大正 14・5・29	震災被害見積調査 (他)	田結部落
2		死亡者・ 重軽傷者人名帳	港村田結
3	6・3	現在家族状況調査	復興調査委員
4	6・6	罹災救助願人名	城崎郡港村田結
5	6・7	生活困窮者調	復興委員会
6		小作・自作段別分 類書	〃
7	6・9	山崩・亀裂箇所ノ 調査	〃
8	6・10	一時救助を要する 者の氏名	〃
9	〃	罹災者救助出願	港村田結
10	6・17	罹災申告書	〃
11	?	兵庫県城崎郡港村 大震災被害調	港 村
12	?	〃	〃
13	?	郡役所調査被害 表写	〃
14	6・6	震災致命傷・重傷 ・軽傷者統計	城崎郡港村田結
15	6・24	母乳困窮者取調書	〃

(2) 救恤に関する記録

1	大正15・ 6・	農具(金鍬) 分配手控	港村田結
2	6・14	農具(鍬)給与者調	〃
3	(9・11)	県ヨリ配給ノ甘藷 ヅル配布届出	〃
4	6・8	労働応援者 芳名簿・借用物控	港村田結 震災救護事務所
5	6・14	配 米 表	〃 配給事務所
6	6・16	バラック材料分配 控	復興調査会
7	6・17	バラック配布届	〃
8	7・	恩賜金 全半壊又 は破損人名帳	〃

9	7・	恩賜金 重軽傷人名帳	〃
10	7・20	配 米 表	田結村
11	8・	大阪朝日・毎日新聞 義捐金分配帳	田 結
12	8・8	〃 (住家 倒潰ノ部)	田結村
13	8・8	〃 (重軽傷者 ノ部)	〃
14	5・24	第1区救護品分配 帳	清水手簿
15		第2区 〃	〃
16		第3区 〃	係 員
17		第4区 〃	〃
18	10・15	小屋掛料	田結部落
19	11・	就業費分配帳	田 結
20		県義捐金分配帳	〃
21	昭和 2・4・16	第2回 〃 港村ヨリ配当義捐 金分配帳	〃

(3) 救護・復興に関する記録

1	大正14・ 5・23 ^地	震災救護事務所 手簿(来訪)	城崎郡 港村田結
2	〃	〃	〃
3	〃	No.2(救護名・受)	〃
4	〃	No.3(〃 ・払)	〃
5	6・28	購売品請求帳	田結震災 救護事務所
6	6・	空箱其他売却帳	事務所
7	6・	事務所経費控帳	〃
8	6・30	日 役 帳	港村田結
9		震災復興に関し 村中合規約	〃
10		港村震災復旧住宅 資金貸付規約	〃
11		荒地免租年期願 震災当時殊功者 報告原稿	〃
12	15・5・23	大震災供養 第1回施行記録	区長 清水俊次

地区に住宅を買い置いたり新築したものが七件あったが、肝心のそちらの方が全焼のうき目にあっている。

七月二十五日の時点で、期限後のバラックの転用案として、二戸分を一戸として適地に移し住居兼用の公設市場または自宅加工場に変更する案が出ている。

バラックの利用状況は罹災者が町民でないもの、罹災者名義で借りていても又貸しされているもの、無断でバラックを改造しているもの、他に自営バラックや新設家屋を持ちながら臨時使用人の寝所や倉庫にあてているもの、無断で空部屋を利用しているものなどがあつたらしい（『小田井町文書』）。

震災後の整理・復興・産業の振興を計るため、豊岡町は十四年六月二日に臨時復興部を置いて規定を設け、広く官公民を網羅して関与させた。十四年七月十一日には、震災による復興事業完成のための土地交換・分合・区画変更配置を行なうため豊岡町復興区画整理組合定款を定めた。その他、町の対策及び罹災民会の動きは、後章に詳述する。

円山川改修計画で移転予定の小田井は、既定の耕地整理計画による寿ロータリー経由斜線路と、新設の堤防沿いに再建される県道とを条件に組合加入を決めた（『小田井町文書』）。豊岡駅と小田井、ひいては堀川橋を通じて丹後地方を最短距離で結ぶことによって、小田井町域の復興を意図したものである。